

平成 26 年度 推薦入試試験問題（第一部 商経学科）解答例

問 1 (30 点)

【採点のポイント】

- ・文章のなかから、疑問と問いのそれぞれについて説明されている箇所を見つけることができているか。
- ・正しい日本語を用いて適切に要約できているか。

【解答例】

疑問は、「ちょっと変だなあ」や「不思議だなあ」というように、感じるもの、思うものであり、それゆえ感じるだけで終わる場合が多い。それに対して、問いは立てるものである。すなわち、解答することを前提とした問いとして表現し、位置づけし直すことで、その答えを探し出そうという行動につながるものである。

問 2 (30 点)

【採点のポイント】

- ・文章のなかから、問いの重要性および必要性について述べている箇所を見つけることができているか。
- ・正しい日本語を用いて適切に要約できているか。

【解答例】

漠然と疑問に思うだけでは問いは立てられない。したがって、解答を前提とした問いを立てることが重要になる。その方法の 1 つに、「問いのブレイクダウン」がある。すなわち、最初の大きな問いを複数の小さな問いに分け、それぞれの問いに答えていくことで、最初の問いへの解答になるようにする方法である。そうすることで、最初の漠然とした疑問を、複数の関係し合う具体的な問いに分解でき、そもそも何を問題としているのか、どうすれば解答にたどり着けるかが明確になる。要するに、最初の疑問で見過ごされていた新たな側面を見つけ出し、最初の問いとの関係を考え、問いを次々と展開させていくことが重要である。

問 3 (40 点)

【採点のポイント】

- ・取り上げた題材が、社会や経済と関連しているか。
- ・最初の漠然とした疑問を、具体的な「複数の問い」に分解することができるか。
- ・分解された問いが、最初の「漠然とした問い」の構成要素となっているか。

【解答例 1】

漠然とした問い：「なぜこの会社は失敗したのか」

複数の問い：「そもそも失敗とは何か」、「景気が悪かったからか」、「商品が売れなかったのか」、「ライバル会社との激しい競争に負けたのか」、「資金繰りに失敗したのか」、「従業員が力を発揮できなかったのか」、「新しいことにチャレンジできなかったのか」、「経営者の判断が間違っていたのか」、「お客さんの心をつかめなかったのか」

【解答例 2】

漠然とした問い：「なぜ格差社会になったのか」

複数の問い：「そもそも格差とは何か」、「本当に格差社会になっているのか」、「お金持ちがよりお金持ちになったからか」、「貧しい人が増えたのか」、「平均的な家庭の収入が少なくなったのか」、「景気の悪化が原因なのか」、「政府の政策が悪かったのか」、「働こうとしない人が増えたのか」